

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第10号 (平成30年6月)

- ミドリ 「牧野にまた来たわね。ここは、^{ろくめんどう}六面幢の他にもまだいろんなものがあるんでしょう？」
- ふみお 「ちょっとその前に、ぼくは、六面幢に彫^ほってある字が気になっていたんだ。」
- あゆむ 「あ、この字だよな。」
- ミドリ 「なるほど。真ん中に、明なんとか九年八月じゃない？ それに、右には…、^{だいく}大工？」
- ふみお 「^{めいおつ}明應九年八月廿二日だよな。」
- 文じい 「ほほう！ よく読めたな。」
- あゆむ 「“廿”という字で二十なの？」
- 文じい 「^{プラス}十 + 十 と横に書くと二十で、廿という字にしたのじゃろう。」
- あゆむ 「なるほど、昔の人はよく考えたね。」
- 文じい 「それから、他の字は次のようになっているそうじゃ。」

牧野の

によらいじろくめんどう 如来寺六面幢

そのつづき、と、

によらいじあと 如来寺跡の

かりやくにねんさんぞんいたび 嘉暦二年三尊板碑

げんこうさんねんだいにちいたび 元亨三年大日板碑



同佛師 本願	申	明應九年 八月廿二日	庚	大工周防助 高阿弥佛
-----------	---	---------------	---	---------------



- ミドリ 「大工というと、大工さん？」
- ふみお 「石大工のことじゃないかな。」
- 文じい 「^{すおうのます}周防助、造った人の名じゃろうのう。」
- ふみお 「^{こうあみぶつ}高阿弥佛というのは？」
- 文じい 「ふむ。左に“^{ぶつし ほんがん}同佛師 本願”とあるから、この人たちも一緒に十王や地蔵菩薩の^{ぞう}像を彫って、建てたということなのかのう。」
- ミドリ 「左の面にも字のようなものが見える。」
- 文じい 「“^{だんなどうぜん}旦那道善”とある。道善という名の旦那。旦那というのは、^{せしゅ}施主、つまり、この六面幢を建てた主人のことじゃな。」
- ふみお 「お坊さんの名前みたいだね。それに、^{くわ}詳しく彫ってあるのはめずらしいのでは？」
- 文じい 「そう、それで県の文化財に指定された。」

ミドリ 「ところで、その他のものはどれ？」
 文じい 「ほれ、すぐあそこだ。」
 あゆむ 「あの森のところ？」



ミドリ 「樹木で見えなかったけど、ここに市指定の文化財が2つもあったのね。」
 文じい 「ふむ。正面のものは、嘉暦二年三尊板碑。それから、右側には、元亨三年大日板碑。」
 ふみお 「そおっと見せてもらっていいかな。」
 文じい 「待ちなさい。まずこのようなものは供養のために建てたもの、しっかりお参りしてから拝ませてもらおう。」
 あゆむ 「六面幢ではお参りしなかったな…。」
 文じい 「ん、うん。ま、それは後にして、これらを見せてもらおうと、次のように見える。」

＜嘉暦二年三尊板碑＞

(1327年)



ミドリ 「三尊^{さんぞん}というのは？」
 文じい 「中央上に、阿弥陀如来^{あみだにょらい}のキリーク。右は、観音菩薩^{かんのんぼさつ}のサ。左に、勢至菩薩^{せいしぼさつ}のサク。」
 ふみお 「そして、”牛法師^{ぎゅうぼうし}の為也^{ためなり}”と読むのかな。」
 文じい 「おお、そうじゃろう。たいしたものだな。」
 あゆむ 「へえ、やるな。じゃこっちはどうだ。」

＜元亨三年大日板碑＞(1322年)



ふみお 「種子^{しゅじ}は大日のアーンク。字は、うーん…。」
 文じい 「ふむ。よくは読み取れないが、子が親の靈^{れい}を祀^{まつ}るためという、孝子^{こうし}、敬白^{けいぱく}という字がおおよそ検討がつく。ただ、年号は、二年だという見方もあるようじゃ。」
 ミドリ 「それにしても、如来寺^{にょらいじ}という寺がこの辺にあつたのかしら。」
 文じい 「そうじゃのう。如来寺^{にょらいじ}という地名があることからして、寺があり宗教文化^{しゅうきょうぶんか}の中心地ではなかつたかと言われておる。実は他にもあるのだ。また来なければならんぞ！」

